

最優秀賞

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「想いの形」

沖縄県立名護高等学校3年 與儀龍

お母さんのお腹の中にいる頃から、お世話になる医療の現場。僕たちの生活の中で、一番身近で、大切な現場なのかもしれない。なに不自由なく育ってきた僕に突き付けられた現実。

「急性骨髄性白血病です。三歳の誕生日は、迎えることは出来ないかもしれないません」。

と話す主治医。僕の両親はどんな気持ちで受け止めたのだろうか？

それから僕の闘病生活が始まった。骨髄検査や採血、造影検査、抗がん剤による治療。普通の治療薬と少し違うのか、赤や青、オレンジ等独特の色と血管痛が記憶に残る。過酷な治療、重度な貧血や血小板減少が起り、輸血が必要になる。何度も何度も、輸血にお世話になった。沢山の人の善意によって僕の命は繋がれたのだ。もし輸血が出来なかつたら、今の僕は存在しないかもしれない。

治療が進むにつれ、髪の毛や眉毛、まつ毛までも抜け、まるで気合の入ったヤンキーのようになった。そんな十五年前だが、なぜか楽しい思い出として、僕の記憶に残っている。病院生活や治療が苦しくて嫌にならないように、いつも楽しく過ごせるように考えてくれた両親。優しく手を差し伸べてくれた看護師。なにより両親や僕の心に寄り添って、良い治療が出来るように声掛けを大切にしてくれる医師の方々によって、僕の命は繋がっているのだ。その時に感じた感動が、今の僕の医療への道へ進む原点である。

移植をして退院五年後に、すい臓の機能が停止し、一型糖尿病になる。「どうして僕だけ」と嘆きたい気持ちでいっぱいになった。何十万人に一人という難病を、なぜ自分が二つも経験しなくてはいけないのだろうか？ 糖尿病と聞くと、生活習慣で起こる二型糖尿病を想像してし

まう人が多く、「甘い物の食べ過ぎ」や「親がいけない」など、根拠もないことを言われ、家族が傷つくことが沢山あった。その頃、一型糖尿病を抱える子供と家族が参加することの出来るサマーキャンプを紹介してもらい、僕も参加することにした。「自分だけじゃない」と思えると、受け止め方次第で、普通に生活が出来るんだ！と思え、心が軽くなった。一生治らない病気だからこそ共存し、仲良く生活していく。だから、この病気を愛しい存在と考える方が、心にゆとりが出来、日々の生活が穏やかに過ごせると感じるようになった。

色々なことが嫌になり、学校へ行けなくなった頃、僕や両親を支えてくれたのは、医療の現場の関係者や同じ病気を抱える家族の心くばり。その優しさが、僕の心を少しずつ動かしていったのだ。

闘病生活で共に闘った戦友の死。幼いながらに感じた命の重さ。僕は命に関することに敏感になった。入院生活を通して知り合った、友達やその家族との繋がりは、僕の中で大切な存在になっている。その経験を生かし、僕は医療の道を目指していきたいと思う。経験をしたからこそ話せることや寄り添うことができると思うから。そして何より、僕が今生きていることへの恩返しを、少しでもしたいと思っているのだ。

お互いが手を引き合い助け合う。痛みを分け合い、声を掛け合う。これが心の足し算だ。辛い時こそ、手を差し伸べる。それだけで「幸せ」が「幸せ」に変わるように。

僕は思う。困難にぶつかった時ほど、周りの人と共に支え合い、繋がることで強く生きていけると。一つの命を支える大切な「絆」が結ばれるから。